

青春スクロール

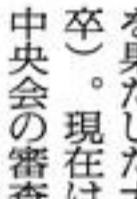
母校群像記

<http://t.asahi.com/dnnn>



「トラック1杯分の入社案内」には目もくれず、プロ入りした小林

青春をスポーツに打ち込んだ多摩高校の卒業生も、さまざまな世界で活躍している。東大からロッテに入団して話題となつた野球部投手の小林至（46、1986年卒）は、江戸川大教授の肩書のまま福岡ソフトバンクホークスに出向し、執



多摩高校 ②

行役員の重責を担う。「多摩高野球部はとにかく練習が厳しかった」。早朝からグラウンド整備、授業中もボールを縫つたり磨いたり。あたりが真っ暗になるまで練習した。「（強豪校の）武相か法政二高ならともかく多摩高でこれはないだろう、とぼやいていた」と笑う。

野球部エースで、3年夏の神奈川大会で多摩高初の4強入りを果たした大森正久（55、77年卒）。現在は全国農業協同組合中央会の審査役、ITアーネット・U

を結ぶNPO法人の事務局長として奔走する。「4強になれたことで、どんな難しい仕事も『やつてやれないことはない』との気持ちで臨めるようになつた」。この大会の優勝校は、原辰徳選手（現・巨人監督）がいた東海大相模だった。

三井物産金属業務部長の得田大森は夏の神奈川大会で4強入りした時のエース

「多摩高には博士号を持つ生物の先生とか、生徒のレベルに関する法政大を相手に8回から登板し、延長14回まで投げ合つた。」「人生や仕事に大切な勘の良さは、多摩高陸上部顧問の深谷昌昭先生に『常に挑戦する心』を教えていただいたから」と振り返る。18日、東日本実業団陸上競技選手権に出場する。

川崎市医師会長の高橋章（68、1964年卒）はバスケットボールに明け暮れた。部の主将を務めるなど、持ち前のリーダー気質は当時から。「医学部志望だったが成績はいま一歩。でも先生は、ダメとか受けるなどと言わなかつた」。小児外科医と

勘の良さ 野球で磨く／県4強の誇り

秋のリーグ戦で江川卓投手率い

球時代から大森の1年先輩。東大1年の時、東京六大学野球の

儀生（56、76年卒）は、少年野球時代から大森の1年先輩。東大1年の時、東京六大学野球の秋のリーグ戦で江川卓投手率いる法政大を相手に8回から登板し、延長14回まで投げ合つた。

た高橋は「希望の仕事に就いても働いていられるのは、多摩高にいたおかげ」と語る。

多摩高は合唱コンクール、球技大会、川崎大師（川崎区）まで歩く大師強歩など行事が多い。メーンは文化祭と体育祭からなる9月の多摩高祭。体育祭では3学年を縦割りに、組ごとに「マスコット」と呼ぶ高さ数メートルの巨大な張り子を作るのも特徴。各組のリーダーは卒業後も「○組団長」と呼ばれることが多い。多摩高に関する情報はkanagawa@asahi.comの「青春スクロール係」へ。

して活躍し、82年に独立開業した高橋は「希望の仕事に就いても働いていられるのは、多摩高にいたおかげ」と語る。

◎ 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。

すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。